

# 山辺丈夫のノートに関する一考察

—— ジェヴォンズとの関係 ——

阿部秀二郎

## はじめに

大阪紡績会社の設立・拡張に貢献し、東洋紡績会社の社長になった山辺丈夫が、留学中にロンドン大学でジェヴォンズの講義を受けていたことは有名である。そして山辺丈夫の伝記および研究書から、山辺丈夫のロンドン大学での目的は保険を学修することにあったことも把握されている<sup>1)</sup>。しかし残念ながらなぜ保険なのか、そしてなぜジェヴォンズの講義を受けていたのかについては明確ではない。

本論文では、山辺丈夫が残したノートを紹介・考察している井上琢智の分析について、追加的に調査・考察を行う。調査・考察の結果、次の事を明らかにすることを目的とする。

山辺丈夫のノートは何らかの事情に基づき認めたものであるが、山辺丈夫の留学前の事情、留学後の事情と関係性を有していることを提示すること（そのことは必ずしもジェヴォンズの影響が薄いと云うことではない）、したがってノートはロンドン大学在学中における山辺丈夫自身の知的展開を提示することを示す。さらに山辺丈夫のノートからジェヴォンズ研究に貢献できる点に関しても模索する。

これらの目的を達成するために、本論文を次のように展開する。まず、Iでは、井上琢智による山辺丈夫のジェヴォンズ講義ノートの理解を紹介する。IIでは、山辺丈夫のノートの内容を紹介していく。IIIでは、ノートに関する分析を行う。IVでは、山辺丈夫の経歴と学修経過について考察を行う。Vでは、ノートの位置づけを考察する。最後に考察結果をふり返り、研究の意義・可能性を提示する。

本論文の意義は次である。

山辺丈夫のノートに関する分析を行うことで、山辺丈夫に関する留学時代の思想の展開を明らかにすることで、山辺丈夫の思想を研究すること。その研究を通して山辺丈夫及び日本経済思想史の研究に貢献すること。次に、井上琢智によるジェヴォンズ研究を補足すること。具体的には山辺丈夫のノートに書かれている内容の分析からノートがジェヴォンズとどのように関係するのか、当時のジェヴォンズの思想を明確にすることで、ジェヴォンズ研究に貢献すること。

---

1) 庄司・宇野【1918】16ページ、石川【1923】107ページ

## I. 井上による山辺丈夫ノートの紹介・評価と分析

井上【2006】により、次の事実が判明している。山辺丈夫は1878-9年にロンドン大学のユニバーシティ・カレッジに在籍しており、山辺丈夫の現存するノート3冊のうち、2冊がジェヴォンズの講義ノートであること<sup>2)</sup>。さらに井上は講義ノートを、次の三点について評価できるとした。

- ① ジェヴォンズ経済学が山辺丈夫を通じて当時の日本の経済学に普及しなかった。その原因には次がある。講義ノートには効用理論や交換理論のような純粋経済学の部分は含まれておらず、貨幣や景気変動や政府の役割などのような応用経済学の部分が含まれていること、その原因として理解ができていなかったこと、山辺丈夫の興味が「応用経済学」の領域であったこと、山辺丈夫自身が実業界に進んだこと。
- ② ジェヴォンズの有名な太陽黒点数と景気循環との関係に関する説明が、1875-6年度のオウエンズ・カレッジでの講義には含まれていないのに対して、山辺丈夫の講義ノートには関連する指摘があり、かつ1878年にイギリス科学促進協会で報告された資料の一部が講義でも利用されていたことから、ジェヴォンズの太陽黒点数の変化による景気循環の説明がこの時期に発展していたことが明確に理解できる。
- ③ ケインズによれば、ジェヴォンズは「教育の「専門家」」であった<sup>3)</sup>。その根拠は、ジェヴォンズは当時の経済学のスタンダードでもあり、ジェヴォンズ自身の考え方とは対立するミルの経済学を学生に教え、ジェヴォンズ自身の説をなるべく教えないようにしたからである。しかし講義ノートでは必ずしもそうではないことが理解できる。

## II. ノートの内容

井上の評価に関して、本論文で対象とするのは①、③である。②については、紙幅の関係及び主題との関係性から本論文では対象としない。<sup>4)</sup>

井上【2006】は、ノートはAとBに整理され、少し前に数年前にマンチェスター・オウエ

2) 他の一冊は「W.S. ジェヴォンズの著書 *Money and the Mechanism of Exchange* (1875) の部分訳 (Chap.22, The Cheque Bank のすべての節のほぼ全訳) が記されている」(井上【2006】160ページ)

3) ケインズはジェヴォンズを評価していたために、ケインズのジェヴォンズ評においては、ジェヴォンズ自身の考え方ではなく、ミルの考え方を学生に教示することで「ジェヴォンズの講義の価値は…損なわれた」としている。(ケインズ【1992】301ページ, p.148)

4) すでにケインズが『人物評伝』において、次の点を指摘している。ジェヴォンズは、オウエンズ・カレッジでの1875-76年の講義ノートとイギリス科学促進協会F部会 (British Association, Section F) での1875年の報告、及びその後の1878年の同部会報告や *Nature* での論文などを通して、太陽黒点説による景気循環論の説明を少しずつ変化させた。(ケインズ【1992】206-277ページ, pp.118-128)

ンズ・カレッジで行われた講義及び当時のユニバーシティ・カレッジでの講義案の順序と山辺のノートとの内容を照らし合わせている。

ノート A とノート B について、まずはまとめてみる。

ノート A :

1. バスティア (Bastiat) の経済的事象：経済学を学習する意味についての説明 (*Essays on Political Economy* 中の「That which is seen, and That which is not seen」からの引用)
2. 一行のみのフランシス・ベーコンの啓発的な言葉：哲学者は「将来世代の僕」
3. 生産物の分配 (j)
4. 紙幣  
紙幣発行の歴史
5. 地代の説明 (j)：生産力説  
地代の説明 (s)：競争説
6. バスティアの貯蓄に関する説明：奢侈が持つ意味の理解に必要な長期的視点 (*Essays on Political Economy* 中の「That which is seen, and That which is not seen」からの引用)
7. ユア (Ure) の製造業進展に関する分析：『製造業の哲学 (*Philosophy of Manufactures*)』(日本語)<sup>5)</sup>  
ユアの工場労働者の健康維持に関する説明：『製造業の哲学』の工場労働者の健康 (Health of factory inmate) 及び『綿産業 (*Coton manufacture*)』<sup>6)</sup>
8. 関税の人民への負担：労働報酬の減少と生計費の上昇
9. 財価値の上下は財への需要を減少増加させる  
(Mill) 生産費が価値の費用  
(Carey) 物の実質費用は支出された労働
10. 賃金基金説：平均賃金の導出  
(Adam) 競争以外に賃金率を下げることは出来ない
11. バスティアによるナポレオンの偉大さの説明：富の労働者への波及 (*Essays on Political Economy* 中の「That which is seen, and That which is not seen」からの引用)

5) 井上【1986】で指摘されているように、第3章である。山辺丈夫はこの章（「工場制度の地形学と統計」）から産業の発展の理由をユアの説明の順序を並べ替えて抽出している。(Ure【2003】pp.67-69)

6) 山辺のノートでは「第壹卷十三枚メ」とあるが、序章における xiii ページを指す。(Ure【1836】p.xiii) タイトルは山辺のノートのママ

ノート B:

1. クーポン, トレージック, システム
2. ジョン・ワトソン (John Watson) の「Art of Weaving」  
イギリスにおける製織の歴史の紹介:『製織技術の理論と実践 (*The theory and practice of the art of weaving*)』<sup>7)</sup> (部分的に日本語)
3. ユア (Ure) の綿製織の歴史<sup>8)</sup>
4. ミルの交換手形の説明
5. (Jevon) 交換手形の定義
6. (j) 約束手形, 信用等に関する説明
7. (j) 複本位制の説明
8. バスティアの「教育について (About Education)」:『*Essays on Political Economy*』中の「What is money」からの引用
9. 交換の形態について, 船荷証券などの説明
10. 銀行倒産数の推移のグラフ
11. 商業変動のグラフ
12. 太陽の熱度の歴史的周期性の話とグラフ
13. 12のグラフに基づいた分析:穀物危機は不作が原因であるという説に対して, ジェヴォンズは赤道付近の極熱と不景気との関係を説明
14. バスティアの「政府について (About the government)」:『*Essays on Political Economy*』中の「Government」からの引用
15. 「貨幣」バスティアの説明
16. (j) グレシャムの法則
17. 価値標準の変動性の説明

### Ⅲ. ノートの分析

引用が多くされているバスティアならびに, ユアについて分析を行う。

#### Ⅲ-1. バスティア

ノートには, 確かに保険に関する項目, 太陽黒点説を想定させる項目, 政府に関する項目も

7) ノートの段落の前についている数字は概ねページと一致している。35 ページは日本語で記入されている。(Watson 【1873】) ノート内の「千八百七十二」は原文では「1822」となっている。次に, その後に続くユアとの間にはワトソンのイギリスの綿輸出入に関して分析を行った結果関税を掛けるべきではない旨の記述が日本語でなされている。

8) Ure 【1836】 pp.6-7

含まれているのではあるが、必ずしもそれらだけではない。ノート A、ノート B ともにバスティアからの引用が多く含まれているからである。

バスティアはジェヴォンズが 1866 年にオウエンズ・カレッジで行った講演「経済学の知識を広める重要性」の中で指摘し (Jevons [1981] p.46)、その後も初学者に推薦する入門書 (ホジソンによる翻訳「What is seen, and what is not seen.」) の筆者であった。したがってバスティアについて講義ノートで多く触れられていることから推測できる可能性は次である。山辺丈夫がジェヴォンズからの指示もしくは示唆を受けて自ら学修を行った。井上が指摘するように、ジェヴォンズが読み上げたものを筆記した。

井上の説を肯定するための付随的な次の庄司・宇野の分析が存在する。

「外國語を學ぶに主として眼よりして耳よりせざりし爲め、外國語の講義を了解するが如は到底望み得べきも非ざりき。然るに君は經濟學の泰斗ゼボン博士の講義を聴き之を了解するに甚だしき困難を感じざりし」(庄司・宇野【1918】16-7 ページ)

つまり山辺丈夫の英語の聞き取り能力が十分ではないという前提である。そうだとした場合に、バスティアの入門的な内容は確かにジェヴォンズの効用理論・交換理論・価値理論などよりも十分に理解しやすいものであっただろう。

一方で、なぜバスティア以外の経済学者がほとんど提示されていないのかという問題もある。というのも、1875-6 年のマンチェスター・オウエンズ・カレッジでのジェヴォンズの講義ノート (学生の手ロルド・ライエツトによる) には、バスティアに関する言及が一切ない<sup>9)</sup>。一方で、同ノートでは、スミス・シニア・マルサス・フォーセツト等の名も挙げられている。

さらに、ジェヴォンズはバスティアを次のような文脈で利用する。経済学は短期的にはではなく長期的な視点を持つ必要があり、短期的な視点ではマイナスに見えることも長期的な視点ではプラスになる。そしてその例として「チャリティー」の事例が利用される。この「チャリティー」に関する内容が同ノートにも含まれているのであるが、もちろんバスティアまたはホジソンの名前は見当たらない<sup>10)</sup>。

### Ⅲ-2. ユアとジョン・ワツソン

ジョン・ワツソンはグラスゴーで Gilmour & Kerr 社の経営者をしており、ジャカード力織機を利用した製織技術の改良で特許を取得するなど技術者でもあった。そして『製織の理論と

9) ジェヴォンズがユニバーシティ・カレッジで認め、1878 年に出版された経済学の入門書においては、経済的な知識の早い頃からの啓発の必要性が長くイギリスで認められており、バスティアの翻訳を行ったホジソンもその啓発を行った一人として挙げられているものの、バスティアの名前はやはり存在しない。(Jevons [1878] p.6)

実践』(*The theory and practice of the art of weaving*)という書を認め、その中でユアの著書に言及をしている<sup>11)</sup>。言及されている部分は次の文脈である。古代から実学的な知識を重んじ科学的な知識が技術と結びついてきた歴史がある一方で、古代の哲学者(プルタルコス、プラトン)は実学的な知識の活用を批判した。しかし17世紀・18世紀当時の科学者の知識は科学技術などに結びついており、その先端的な事例として綿工場が挙げられるとしている。ユアは言及されている部分の後で、原材料供給地と技術生成地との歴史的な関係に関する分析を行うのに対してワトソンは、ユアを引用し、科学技術が結実しているとユアが称するイギリス綿工場の歴史を解明していく。

一方で、ユアは『製造業の哲学』、『イギリスにおける綿製造業』という2冊の有名な著書を出版している。ユアについては、日本において社会政策や機械や分業に関する視点からの生産性の議論などがすでに研究蓄積として存在している<sup>12)</sup>。ユアはワトソンと同様にグラスゴー出身で、スミス同様に大学で講義を行い、執筆活動・啓蒙活動を展開した。彼の知識は天文学や地質学など科学全般にわたり、指摘したように科学と哲学との関係にも言及するなど博識であった。

ユアの『製造業の哲学』は、次の問題提起を行うものであった。彼の豊富な科学または科学と社会・人間との関係の歴史を含み、それらが結実した綿製織機械を有する綿工場は社会または人間のより好ましい状況に貢献している。しかし労働者の無知またはわがままのために、イギリスに蓄積されている技術や知識が活用されない状況にある。そして『イギリスの綿製造業』ではさらに進んで、綿工場は決して労働者を排除するものではないのにも関わらず、労働者と資本家とが対立し、労働者によるストライキが労働者自身の不利益に結実している。そして労働者の給与がアメリカなどの非関税国との競争に勝利できないことから低く抑えられているのにも関わらず、関税のために輸入に依存する生活必需品が高価であるという事情が労働者を苦しめているのであることをユアは指摘する。

- ✓ 10) 一方でジェヴォンズが『経済学の理論』初版(1871年)では蓄積されていなかった過去の経済学者への訴求が第二版(1879年5月)には展開されており、次のようにバステアを高く評価していることからジェヴォンズが当時の学生にバステアのことを多く紹介していた可能性も否定はできない。

「真の学説(賃金学説:引用者)は、コンディヤック、ボードー、ル・トロースより、J・B・セー、デチュ・ド・トラシイ、ストルチ(Storch)その他を経て、バステア(Bastiat)およびクルセル・スヌイユに至る一連の偉大なフランス経済学者の著作を通じて、多かれ少なかれ明瞭にその跡をたどりうるだろう。」(ジェヴォンズ【1984】xxxix ページ, p.xliii)

しかし、引用にある部分は賃金が基金説によってではなく、需給説によって決定するという文脈であるのに対して、山辺丈夫のノートでは、その点に関する説明は本論文のノートAの「10(Adam)」とあるように、アダム・スミスの説明になっているようである。

11) Newton【1846】p.454, Watson【1873】p.28 参照

12) 吉田【1982】に整理されている(54-55 ページ)。

「関税はこうして人民に対して二つの刃として作用する。まず労働者の報酬を下げる。そして生存費用を上昇させるのである。」<sup>13)</sup> (Ure 【1863】 p.xxiv)

村田【2003】はそれまでのユア研究とは異なり、「A. ユアにおける綿製造業の発展と経済的自由」という論文において、ユアの一貫した自由主義的な思想について展開しているように、ユアの主張は、歴史的な分析を踏まえ、機械などの科学的技術と人間社会との関係に何らかの介入がない自由的な展開が社会全体にとって好ましいという「哲学」であったとして理解する事もできる。

### Ⅲ—3. ノートの分析結果

バスティアは自由主義的市場経済、そして自由主義的市場経済のもたらす社会的な調和への分析を展開した。バスティアの論文集 *Essays on Political Economy* において、ノート A では論文「何が見えるか、何が見えないか」について、ノート B では「貨幣とは何か」「政府」という論文が中心に展開されていた。

ユアはイギリス綿製造業の歴史的発展の分析を行ったが、その分析は、機械は工場労働者を劣悪な状況に陥れており、政府は工場制度への積極的な介入が必要であるという誤った知識の拡散を留めることを目的としていた。さらにユアは労働者の境遇改善がなされない根拠を政府による高関税が原因であるとして、政府の貿易に関する介入に求めた。

以上から、ノートは自由な経済活動の進展を全面的に主張するバスティア及びユアの記述と云う点で一貫していると指摘することは可能である。

これらのことから、山辺丈夫のノートでなぜバスティアが多く利用され、ユアも引用されているのかについては、次の推論が可能である。ジェヴォンズが授業において自由主義的な経済活動の議論を何らかの意図を持って強力に学生に教えるために参考書を提示したか、もしくは何らかの他の理由によってではあれ、山辺丈夫自身が積極的に自由主義的な経済活動とその展開に興味を抱いたということである。いずれにせよ自由主義的な経済活動に関する著書から山辺丈夫が得たであろう印象に関する分析を行うためにも、山辺丈夫の経歴及び学修過程を次に紐解いてみたい。

13) 1784年にピットが課した関税。独立戦争の戦費を賄う目的で課された。(Baines 【1966】 p.279)



## Ⅳ. 山辺丈夫の経歴と学修過程

### Ⅳ-1. 経歴

山辺丈夫の出自等について、筆者が本論文で何か新たな点を加えることは不可能である。「はじめに」で提示した山辺丈夫の伝記『山邊丈夫君小傳』、日記も含んだ研究書『孤山の片影』に山辺丈夫に関する経歴が提示されている。さらに井上【2015】ではイギリス滞在期における山辺丈夫の日記も紹介・分析されている<sup>14)</sup>。ここでは、バスティアとの関係について抽出することにする。

石川【1923】には、山辺丈夫の「年譜」が提示されている。そしてその「年譜」等から山辺丈夫の出自から紡績修行開始までの経歴について、次のことが理解できる。

山辺丈夫は嘉永四年に津和野において誕生し、4歳の時に養子となる。さらに15歳（慶応元年）に藩校「養老館」に入校し、16歳（慶応二年）の時に藩命により、日蓮宗から神祭となる。さらに20歳（明治三年）に文学研究の為に東京へ遊学を命じられ、福羽美静<sup>15)</sup>の「培達義塾」に入学後、西周の「育英社」で学ぶ。その後23歳（明治六年）に、大阪において、後に親友となる莊田平五郎<sup>16)</sup>のいた慶應義塾の大阪分校で学んだ。その後24歳（明治七年）に西周の「育英社」で再び学ぶ。27歳（明治十年：1877年）に亀井茲明とともに、イギリスへ渡航する。29歳（明治十二年：1879年）に洪沢栄一の交渉に基づき、紡績のための修業を開始する。

### Ⅳ-2. 学修過程

#### Ⅳ-2-1. 経済学

ここで注目しなければならないのは、西周である。山辺丈夫とともに津和野藩出身であり、津田真道とともに外国（オランダ）への渡航を強く希望して、1862年に実行した<sup>17)</sup>。西周は渡航する以前に次のように経済学、経済思想についての一定の知識をすでに有しており、留学においてその知識を修得する希望があることを友人の松岡鑄次郎<sup>18)</sup>に書簡で伝えている。

14) 紡績業に関する山辺丈夫の貢献については、加藤【1986】が著名であるが、それ以外に大津寄【1993】、山崎【2013】なども参照。

15) 西周とともに、津和野藩出身の国学者。山辺丈夫が改宗する事情にも関連している。ジョン【2006】によれば、津和野藩主亀井茲監と、福羽美静香らの神仏分離という「津和野派イデオログ」が仏教の影響力を弱めるのに貢献するのに役立ったのは事実であっても彼らが廃仏論者であったわけではなく、当時の他の官僚の廃仏論が影響を持つようになった。

16) 木下【2012】によれば、莊田平五郎は1881年に阿部泰蔵らとともに、「有限明治生命保険会社」の設立に貢献した。福沢諭吉により1867年の『西洋旅案内』及び、1868年の慶應義塾での講義等を通じて慶應義塾の学生に保険に関する情報が提供された。さらに、慶應義塾出身者を中心とした交詢社というアソシエーションが明治生命成功の背景に存在した。

17) 安酸【2016】132ページ、石附【1992】31ページ。



「小生頃來西洋之生性理之學，又經濟學杯之一端を窺候處，實ニ可驚公平正大之論ニ而，從來所學漢說とは頗端を異ニシ候處も有之哉ニ相覺申候，尤彼之耶蘇教杯は，今西洋一般之所奉ニ有之候得共，毛之生たる佛法ニ而，卑陋之極取へきこと無之と相覺申候，只ヒロソヒ之學ニ而，性命之理を説くは程朱ニも軼き，公順自然之道に本き，經濟之大本を建たるは，所謂王政にも勝り…」(大久保編【1966】八ページ)<sup>19)</sup>

さらに西周がオランダでの指導教員が分かっていない段階で未知の師に対して出した要望書において、次のように経済学を含めた全体的な知識の概要を吸収することが目的であることも理解されている。

「ヨーロッパ諸国との関係において，また内政および施設の改良を行うためにも，より必要な学問及び統計学 Statistiek 法律学 Regtsgelerdheid 及経済学 Economie 政治 Politiek 外交 Diplomatie 等の学問は全然知られていない。

それ故に我々の目的は，これ等一切の学問を学ぶにある。僅かな滞在中に，このように多くの，そしてそのように大切な事柄を全部学ぶことは，実に不可能な事であるから，此等の諸学科を一章一章順序をたてて学ぶのではなく，それは今後第二回に派遣される若い学生にやらせることにして，私の計画は要領をかいつまんで学ぼうと思う。」(大久保【1997】26 ページ)

さらに，西周が津田真道と共にオランダで師事したフィッセリング (S.Vissering)<sup>20)</sup> については，堀【1975】(114, 117 ページ)，西川・ステーンベーク【1997】(149, 155 ページ)によっても自由主義経済学者としてセイ，バステミアらの影響が強かったことが理解されている。

西周が学修したであろうフィッセリングの講義については，三辺【1941】や杉山【1983】の分析を踏まえた，西川・ステーンベーク【1997】による研究蓄積がある<sup>21)</sup>。杉山【1983】において，津田真道が経済学に関して残したとされるノート (De beginselen der

✓ 18) 西周とともに，儒学者の後藤松陰や洋学(蘭学)の手塚律蔵に学び，亀井茲明に漢学を教えたりもした。(石川【1923】77-81 ページ)

19) 安酸【2016】では，森鷗外伝記に従っている。杉山【1981】3 ページ参照

20) ジェヴォンズの『経済学の理論』第2版の序文では「M.Vissering」とある。この「M」はしかしながら，「W」の可能性がある。「W.Vissering」は，西や津田に経済学を教示したシモン (Simon) の息子ウィレム (Willem) であり，ジェヴォンズが1878年2月にドルニス・ド・ブルイユ (d' Aulnis de Bouroulli) 宛の手紙の中で，それ以前のウィレムと思われる人物との手紙のやり取りで景気循環に関する情報を得たことを伝えている。その際にジェヴォンズは「M.Vissering」と記している。(ジェヴォンズ【1984】xxi ページ，p. xxi, Black【1977】pp.224-225,229)

21) 飯田【1999】では，フィッセリングに対するドイツ歴史学派の影響の可能性を提示しており，興味深い。

Staathuishoudkunde) と、フィッセルリングの出版物 (*Handboek van praktische staathuishoudkunde*) との対応関係があることが明確にされ、西川・ステーンベーク【1997】において、ノートと出版物との対応関係が詳細に分析された<sup>22)</sup>。

三辺【1941】では、ノートに書かれている内容が西周の『百学連環』と関連する可能性が指摘されたが(135(三九七)ページ)、杉山【1983】によってその可能性は否定された(27-28ページ)。

西周の全集第四巻において、西周が学生に講義したとされる『百学連環』を読むことができる。そこで経済学(「制産学」)について西周が展開している概要を下に記す。

・「Political Economy」という言葉の日本語訳に関して

・経済学の歴史

プラトン、アリストテレス、ボテーロ(Botero)、ケネー。グルネー。チュルゴー。ヒューム、J. スチュアート、スミス。マルサス、セイ、リカードウ、J.S. ミル、J. ミル、シスモンディ、バスティア、ウェイトリー、シニア、フィッセルリング<sup>23)</sup>

・経済学概要

1. Society：相互依存関係・専業と分業
2. Production：生産的労働(農工商)・不生産的労働(知的労働・官僚)
3. Product：消費財の分類：必需品・便益品・享樂品
4. Value：人工価値説<sup>24)</sup>
5. Price：需給決定論
6. Exchange：いち(市)
7. Money Circulation：価値尺度手段・鑄貨・単一複数鑄貨制度
8. Capital：資本金・土地・商品、利子・地代・賃金・ローン・債権、信用
9. Papermoney, Banknotes：紙幣・小切手
10. Taxation：直接財・間接税・地方税

22) フィッセルリングが西周と津田真道に対して講義した五科目(「自然法」「国際公法学」「国法学」「経済学」「統計学」)のうち、津田真道が翻訳するはずであった「経済学」のみが当時翻訳・出版されなかった。大久保【1997】において、自然法は西周、神田孝平によって翻訳・出版され、国際公法学は西周によって翻訳・出版され、国法学・統計学は津田真道によって翻訳・出版されていることが確認できる(30ページ)。

23) それぞれの経済学者の主著などのコメントが西周直筆の覚書には書き込まれている。その中でフィッセルリングは「beginnselen van staathuishoudkunde」とある(大久保編【1981】四九七ページ)。紹介されている他の経済学者の場合、主著が提示されているのに対して、フィッセルリングの場合には、出版物ではなくフィッセルリングから西周が学修したと思われるノートのタイトルが挙げられている。もう一つは前置詞「van」が西周の覚書にはあるのに対して、津田真道のノートにはそれがない。

24) 空気のような自由財に人工を加えることで価値が生ずる(大久保編【1981】二四一ページ)。

## 11. Consumption：生産的消費・不生産的消費

## ・経済学における間違い

1. 独占 2. ギルド 3. 保護主義（農業・工業・商業） 4. 制限・禁止の体制
5. 重商主義 6. 利息制限法 7. 奢侈抑制 8. 政府介入 9. 社会主義
10. 共産主義 11. フーリエ主義

## ・経済学の大本

1. 労働は富の原因である。
2. 特定産業を保護しない。
3. 富とは金銀ではなく、需要を満たすものである。
4. 奢侈も含め、個人の判断にゆだねるべきである。
5. 利己心に基づき行動することが天下にとっても利であり、その流れに竿を指すことは間違っている。

西周の『百学連環』の「経済学」には、さまざまな経済学の知識が含まれており、具体的に誰からの貢献が大きいのかに関して追跡することは容易ではない。例えば「Society」における社会的分業、「Production」における生産的労働・不生産的労働はスミスの影響であろうし、「Value」における人工価値説はスミス・リカードウの投下労働価値とも読める。さらに「Consumption」における生産的消費・不生産的消費における議論では、不生産的消費をも否定しないばかりか、次のように割合にまで言及している点においてマルサスの影響を思わせる。

「此二ツは人生の離るゝこと能はざるものとなすと雖も、不可産の消費、可産の消費に勝るときは、人生を害するに至る。故に可産の消費を七分とし、不可産の消費を三分となさゝるへからず。」（大久保編【1981】二四七ページ）<sup>25)</sup>

他にも個別の点において分析することができるであろうが、杉山【1981】の次の考察は重要であろう。杉山は西周が哲学においてコント及びJ.S. ミルの影響を受けていること、及び上記ノートの「Consumption」内の西周の覚書に、ミルの二分法という特徴があること<sup>26)</sup>から、経済学においてもミルの影響を認めつつも、社会主義へのスタンスがミルと西周では異なると指摘する。このことから、自由主義者としてのバステリアが西周に与えた影響を考察している。

一方で注意しなければならない点は、津田真道が記入したノートでは、第2章に「人間の必

25) 「不可産」は「unproductive」で、「可産」は「productive」である。階級の消費と過少消費というマクロ的な視点ではなく、個人の長期的利益を土台にしている点はマルサスのとは言えない。

26) 分配は部分的に人的制度に基づく（大久保編【1981】五〇〇ページ）という記述がある。価値論は自然法則、分配論は人為的に決定されるという方法論的姿勢を指す。

要とその充足 (De behoeften des menschen en hare vervulling)」が挿入され、人間における生活上の必要・社会的な立場に基づく必要・慣習・より高度な欲望などに関する経済の需要側面が説明されている<sup>27)</sup> 一方で、『百学連環』ではそれが見当たらないことである。

フィッセルングが参照にしたバステアの『経済的調和』は、人為的な社会秩序と自然的な社会秩序のいずれが好ましいかを分析するための科学的な試みであり、『経済的調和』の「1. 自然的及び人為的社会秩序」において、バステアは問題提起を行った後で、「2. 欲望, 努力, 満足」「3. 人間の欲望」と章を展開している。これは、バステアの科学的分析において最初に考察すべきは人間そのものの本性からの分析であったからである<sup>28)</sup>。

また、フィッセルングはやはりバステアの自然的自由的経済秩序の土台に存在している人間の内面への言及を西周や津田真道に伝えようとしたものの、西周はそれを『百学連環』においては伝えようとしなかったと推測できる。

この理由に関して、西周の「学」の分類法に解を求めてみよう。西周の分類法には、一定の規則がある。まず大きな分類として「普通学」と「特殊学」とがある。「普通学」は非特殊であり、「普通学」は個別である。前者は歴史・地理・文学・数学であり、後者は人文科学と自然科学にまず分類される。さらに人文科学は神学・哲学・政治学・経済学・統計学に分類され、自然科学は物理学・天文学・化学・自然史に分類される。これらの分類方法に関してはコントからの影響とされている。この分類において人間の心理については、哲学の領域に含まれている。経済学で扱うところの人間の本性または心理的な現象に関する分析は、西周の分類上経済学から分化せざるを得なかった。そしてその分類にしたがい、消費者の心理的側面を排除した「経済学」はスミス、リカードウ、ミルへつながる系列としてはむしろ一般的であったと言える。

西周はしたがってバステアの影響を受けたフィッセルングが経済活動を消費者の欲望から説き起こそうとした論理ではなく、スミス以降の正統な古典派経済学を学びまたこれを教授したものであろう。その段階で西周の経済学は社会を出発点とした。そして自然的自由的経済秩序を求めるバステアの求める帰結とは共通するものの、自然的自由的経済秩序を追求する際の起点としての人間そのものの本性にまで辿ることはしなかったと指摘できる<sup>29)</sup>。

#### Ⅳ—2—2. 自然科学・力学

『百学連環』の自然科学の分類は、指摘したように物理学・天文学・化学・自然史である<sup>30)</sup>。さらに物理学は次に分類される。「器械学 (Mechanics)」, 「熱論 (Thermology)」, 「光論 (Optics)」, 「電論 (Electricity)」, 「磁論 (Magnetism)」, 「静学 (Statics)」, 「動学 (Dynamics)」, 「流體学 (Hydraulics)」(さらに「音論 (Acoustics)」) に分類される。

27) Vissering 【1999】 s.5-8 参照

28) Bastiat 【1987】 chap.I-III 参照

この力学（器械学）は、数学との関係を有さないか有するかという点で、「單純（Pure）」か「適用（Applied）」に区別される。

そして西周は経済学同様に、その学問の歴史つまり器械学史を展開する。エジプトのピラミッドの建築等に関してすでに原理が知られていたことを指摘した後で、アルキメデスを元祖として紹介する。その後、ガリレオ・ホイヘンス・ニュートンなどの科学者のあとに、並列してジェームズ・ワット、さらにスティーブンソンが紹介されている。

「静學」と「動學」の原理的な説明の後に、「流體學」を説明し、その後「氣體學（Pneumatics）」の説明が展開されるが、この説明は原理だけではなく、道具に関する説明も展開される。「流體學」の場合には、ポンプや水車などであり、「氣體學」の場合には空気ポンプや気圧計などである。さらに「熱論」などの説明においては、「火電（thermo-electric current）」等のエネルギー供給方法に関する説明もある（大久保編【1981】二七三ページ）。

このように、西周の自然科学に関する説明は単なる原理のみの説明ではなく、原理が応用された道具や機械などの具体的な事例の説明もなされているものであった。また、小分類された領域についてもその領域の歴史が紹介されていた。

#### IV-3. 山辺丈夫への西周の影響

主に3点を指摘できる。まず、フィッセルングからバステアへと至る自由主義経済の知識が西周の『百学連環』の「経済学」の土台に存在し、山辺丈夫にとってバステアは思想的に受け入れやすい状態にあった。山辺丈夫のノートにバステアからの引用が多く存在しており、

- ✓ 29) しかしこの原因を西周の儒教思想との関係から説明する可能性がある。朱子学において、欲望などの「氣」が「理」を妨げるという規範的な論理が存在し、西周がそれを学生への学習と云う面で意識したという可能性である。しかし次の問題がある。西周が朱子学を批判したという大久保編【1981】（巻末「解説」）や小泉【2012】の議論と、井上【2005】による西周が儒教思想を当時の時代的文脈の中で否定しなかったという議論とがある。筆者には、『百学連環』の「経済学」において限定的であるということと、西周の「覚書」ではなく、塾生の永見裕の記した「永見本」における記述の調査であるという理由から、いずれが正しいのかに関する判断は困難であるが、『百学連環』の「経済学」に関する記述では、儒教思想の影響を西周が否定していないと取れる箇所と否定している箇所とが併存しているようである。肯定していると思われるのは「Society」に関する説明で、次のように記されている箇所である。

「若し一人にても勞を務めすして他人の勞せしものをを用うるか如きは、之を天道に於て賊となす。」（大久保編【1981】二三九ページ）。

一方、否定していると思われるのは、経済学の大本に関する5番目の記述の中にある次の箇所である。

「大學に生財有大道生之者衆食之者疾用之者舒則財恒足。此の如き説はなほ水の源あるも其下流を塞くか如し。争てか流水滯ることなく止むことなきに至らざるへし。大なる誤説となさゝるへからず。」（大久保編【1981】二五一ページ）

- ✓ 30) 西周の言葉では順に「格物學・星學・化學・造化史」である（大久保編【1981】二五九ページ）。

政府介入に対する疑念などの自由主義経済思想に関する啓蒙的な内容であることはジェヴォンズが講義中に読んだか、指示したかに、自分で学修したかに関わらず、山辺丈夫の留学前の知的前提に沿うものであったことを示している。

次に、西周の経済学のみではなく自然科学をもカバーする『百学連環』の学修が山辺丈夫に対して、社会科学のみならず自然科学的な知識の修得を容易にさせた。「Ⅲ—2」で考察したワトソンによるユアの引用部分は、自然科学特に力学の歴史であり、ユアの綿工場の考え方には、自然科学の原理と技術の発展が結実していることを紹介するものであった。仮に『百学連環』に存在している自然科学に関する素地が山辺丈夫に存在していなければ、ユアの『製造業の哲学』や特にワトソンの『製織技術の理論と実践』への理解は経済学の理論的な知識の修得以上に困難であったはずである。ノートに経済学の理論的な引用が欠落しているのが山辺丈夫の理解不能性を根拠にすることが正しいとすれば、逆にユアやワトソンの引用が存在することは山辺丈夫が彼らの議論を理解していたことを示すものであり、単なる社会科学以外の知的素地が山辺丈夫に存在しており、その素地は『百学連環』から修得したものであると考えるのが自然である。

そして最後は、上に指摘したこととも関連するが、フィッセルリングに存在した消費者の欲望、人間本性に関する分析は西周には受け継がれていないことと関係する。山辺丈夫のノートは仮にジェヴォンズの講義ノートであるとすれば、庄司・宇野【1918】が指摘するように（16-7 ページ）、また井上の講義ノートの評価①にあるように、山辺丈夫の語学力が不足しているなどの原因があり、効用理論・価値理論・交換理論などの理論的内容が含まれていなかったということになる。そしてそれは仮に西周の『百学連環』に、フィッセルリングがまたはバステアが論じた消費者の欲望や人間本性に関する分析が含まれていれば、山辺丈夫が留学前にそれらの知識を吸収する素地が出来上がっていたはずであるが、『百学連環』の内容は正統派的な経済学の内容であるために、山辺丈夫はジェヴォンズの効用理論・価値理論・交換理論などの理論的内容は理解できなかった。

## V. ノートの位置づけ

山辺丈夫のノートが何を示しているのかについて、まとめておこう。まずノートに含まれている内容は大きく次のものであった。バステアの自由主義経済の思想に関する引用・ユアやワトソンといったイギリス綿製造業の歴史あるいは技術に関する引用・スミス、ミル、ジェヴォンズのものと思える引用など・ジェヴォンズの景気循環に関する記載・当時の保険業に関する記載。

上の中でジェヴォンズの景気循環に関する記載・当時の保険業に関する記載は含まなかった。理由は次である。紙幅の都合もあり展開することが不可能である。次に景気循環に関する記載



については現在のところ、井上【2006】の分析以上に得るものはなさそうである。そして当時の保険業に関する記載については調査が不足していることである<sup>31)</sup>。

まず、山辺丈夫のノートはジェヴォンズの授業の講義ノートと言えるかという問題については否定できないという回答になる。理由は次である。

第一に、バスティアとの関係についてである。Ⅲのノートの分析で指摘したようにジェヴォンズのオウエンズ・カレッジでの学生のノートやユニバーシティ・カレッジでジェヴォンズが書いた入門書においてバスティアの名前は多く出てこないし、逆に他の経済学者の氏名が山辺丈夫のノートには含まれていない。しかしながら、次のように解釈することで、限定的にバスティアが多く引用されている理由を説明することは可能である。ジェヴォンズは労働者の賃金決定が需給によってなされるのであり、その論理を理解しない労働者への啓発という面でバスティアを利用している。そう考えるならば、ノート A で多くバスティアが利用されている部分は講義の導入部分としての「経済学の定義」ではなく、労働組合・労働問題・労使関係・分配などの箇所に適合すると考えるべきであろう。さらにユアの『製造業の哲学』や『イギリスにおける綿製造業』に関する部分も労働問題への一つの示唆として考えることもできる。

第二に、ノート B は講義のテーマとほぼ一致するという井上の指摘通りであるし、ジェヴォンズの景気循環に関するグラフの説明は動かぬ証拠ともいえよう。

したがって、ジェヴォンズの講義ノートであるとすれば、講義の最初からのものではなく、途中からのものであると考えることが妥当であろう。井上【2015】によれば、山辺丈夫の日記は1877年8月15日から1878年12月まで省略されている。井上は次のように推測している。

「日記がこの期間省略されているのは、ロンドン着後生活が落ち着くまでの期間であったからである。」(135 ページ)

ジェヴォンズの講義は1878年10月9日開始とあることから、少なくとも12月までの間に山辺丈夫は忙殺されていたのかもしれない。また次のジェヴォンズの講義案にも注意が必要であろう。

31) 「クーポン、トレーディング、システム」は「Coupon Trading System」の翻訳であると思われる。さらに山辺丈夫が説明している文章から、この事例は単なる投資会社の事例ではなく、資産運用会社が福利厚生を図る目的でシステムを運用している事例に関する記載であろうと予想される。The General Expenditure Assurance Company という有限会社から1879年に発行された約束手形の名称でもあるが、山辺丈夫のノートの記載と一致しているかについての確認は出来ていない。この有限会社出版の本が大英図書館には所蔵されているが、筆者は確認できていない。General Expenditure Assurance Company, *January 1879. The General Expenditure Assurance Company, Limited. "The coupon trading system." : Established 1874. No connection with any other company.* London : Printed at the Victoria Steam Press, London, 1879 (British Library のウェブページ参照)



「経済学史—この学期中は、経済科学の諸原理の歴史と文献に対してとくに関心が払われるであろう。…しかし重要な点についての経済学上の知識の発展については、後から適当な期間をあけて行われる歴史についての特別講義のなかで行われるだろう。」(井上【2006】161 ページ)

山辺丈夫は西周の下で、ジェヴォンズの講義案にある経済科学の諸原理そして歴史についてはある程度学んでいた。したがってジェヴォンズの経済学について全く理解できないと云うことは有りえず、何らかの記載が存在している方が妥当であろう。

さらに、ジェヴォンズの講義案を 1876 年、1877 年、1878 年それぞれの年度で比較すると、いずれも 2 部構成となっていることが理解できる。

例えば、1876 年の講義案では、10 月から始まり 12 月で終わる「first course」では、一般的な経済学の理論を教示するとしており、1 月から始まる春学期（「second course」）では特に金融問題に関する応用経済学が準備されているとしている<sup>32)</sup>。

1877 年の講義案では、クリスマス休暇が始まるまでは 1876 年開始のセッションと同様に、価値論・分配論から貨幣・信用・国際決済などの理論を学修し、1 月から始まるセッションでは社会問題を扱うとしている。さらに講義の間における議論の必要性が求められており、課題や評論に関する主題がジェヴォンズから与えられるとも書かれており授業外学習への啓発を確認することができる。

一方で講義ノートであると完全には肯定できない理由は、次である。まず「クーポン、トレーディング、システム」や「Art of Weaving」というノートの記載は講義案の何に関連するかに関して不明である。前者は信用・保険という問題と関連するのであれば、その後に製織技術に関する内容が記載されているのは不明だからである。可能である理解は次であろう。国際貿易論と関連する説明の中でイギリス綿生産増大の原因に関して説明しているという論理である。

また、「政府の役割」と「貨幣」との前後関係が不明確である。

そして何よりも、ユアとワトソンのイギリス綿製造業におけるテーマはその後の山辺丈夫の紡績技術の習得のための修業との関係を推測させるものである。

これらの原因から、少なくともジェヴォンズが講義した内容に関するノートということでは

---

32) そして「first course」においても次のように当時の価値論を批判する記載が存在する。

「最初のコースはまた、セイ、マルサス、リカードウ、シニア、ミル、ケアンズの考え方や、価値の数学理論に対して特に言及することで、価値の本質に関する主要な学説を批判的に考察する。」(University College, London【1876】p.38)

つまりケインズの『人物評伝』とは異なり、ジェヴォンズは一般的な経済学をも紹介しながら自身の数学的な議論を講義の前半部分に行っており、それは 1878 年以前からのものであったのである。

なく、講義においてジェヴォンズが与えた課題もしくは山辺丈夫が興味を抱いたもしくは向学の為にメモを取っていたノートという可能性も否定できない。庄司・宇野【1918】は当時の労働問題が山辺丈夫に与えた影響を次のように表現している。

「君は學校に於ける碩學の講義以外、英國産業界の情態を目撃し、實物教示に依りて活きたる學門をなしたりき。保険學研究の志望を懷いて英國に留学し、大學に入りて經濟學を専攻しつゝ、ありし君が、後に至りて紡績業の研究を志し、遂に一身を斯業に献するに至りし所以のもの、當時君に至大の影響を與へたる活學門に非ざるなきを得むや。」(十八ページ)

1878年の講義案の後半部分に存在している「特別講義」は何を指すのであろうか。1876年の講義案では存在していなかった救貧法・労働組合・工場法などの貧困・社会問題、国際貿易問題に関する議論が1877年の講義案で明確に提示されている<sup>33)</sup>。また当時のジェヴォンズは、『経済学の理論』第二版出版に向けて、自らの理論の正当性を主張すべく、ドイツやフランスの経済学者の情報を集めるために、各国の経済学者とやり取りをしていた。さらに太陽黒点説による景気循環論の構想も有しており、正統派を意識した上での新規的な思考が充実していた時期でもあった。林立する様々な問題とその問題への接近法において多様な学問領域へと研究を進めていく中での講義であった。

山辺丈夫は純粋経済学には興味がなかったということではなく、ジェヴォンズの応用経済学の説明を中心に受講した可能性が高かったのであろう。もしくはその内容がより山辺丈夫に興味を抱かせたという表現が適切かもしれない。

## おわりに

山辺丈夫に関する研究、ジェヴォンズに関する研究に考察の結果どのような付加価値を与えることができたのかをまとめる。

山辺丈夫のノートのジェヴォンズの講義との関係を置くとしても、山辺丈夫は1879年5月にユニバーシティ・カレッジを退学し、工学の研究のためにキングズ・カレッジに入学することになるが、山辺丈夫が自然科学の学修を行う素地は、すでにイギリス留学以前に整えられていた。さらに山辺丈夫のノートではすでに綿製造業に関する知識のみではなく、ワトソンの書を通じて技術的な知識も存在していたと考えられる。同時にユアの書を通じて綿工場で労働する労働者への視点も備えられていたと考えることができる。

大阪紡績会社や東洋紡績会社での山辺丈夫の活躍の背後には、山辺丈夫の資質や努力のみな

---

33) University College, London 【1877】 p.46

らず、留学以前からの西周の影響、イギリス留学後に受講した経済学や工場問題に関する学修が影響を与えていると指摘できる。

ジェヴォンズに関する研究では次の可能性を指摘できる。山辺丈夫のノートが講義に忠実であるとするならば、ジェヴォンズが講義を行った基本的な部分よりも発展的な内容であった可能性が高い。そして井上【2006】で指摘されたように、教育者としてのジェヴォンズはケインズの評価とは異なる。ジェヴォンズは自身が当時格闘していた最先端の問題を学生に提示していたと指摘できるだろう。また、ジェヴォンズは1882年に『国家と労働との関係』という書を認めるとともに「既婚女性工場労働者」を投稿している。妻のハリエットはジェヴォンズが女性工場労働者の労働が幼児死亡率に何らかの影響を与える統計的な課題と格闘していたが未完成であったと指摘している（Jevons【1882】p.179）ことから、ジェヴォンズの研究は、1862年というジェヴォンズの研究活動の初期以降継続的に労働問題と格闘し続けていたと指摘できる。

### 参考文献

- 飯田【1999】：飯田鼎「幕末知識人のヨーロッパ体験と社会科学の認識：導入期の経済学を中心に」『三田学会雑誌』（Vol.91, No.4, 555（1）-576（22）ページ、慶応義塾経済学会）
- 石川【1923】：石川安次郎『孤山の片影』（福音印刷株式会社）
- 石附【1992】：石附実『近代日本の海外留学』（中公文庫）
- 井上【2005】：井上厚史「西周と儒教思想—『理』の解釈をめぐる—」『西周と日本の近代』（島根県立大学西周研究会編、146-182ページ、ベリカン社）
- 井上【2006】：井上琢智『黎明期日本の経済思想』（関西学院大学経済研究叢書 第32編 日本評論社）
- 井上【2015】：井上琢智「山辺丈夫滞英時代（1879）の英文・日本語日記」『経済学論究』（第69巻第3号、133-180ページ、関西学院大学経済学部研究会）
- 大久保編【1966】：大久保利謙編『西周全集 第一巻』「哲学篇」（宗高書房）
- 大久保編【1981】：大久保利謙編『西周全集 第四巻』（宗高書房）
- 大久保【1997】：大久保利謙「津田真道の著作とその時代」『津田真道 研究と伝記』（3-104ページ、みすず書房）
- 大津寄【1993】：大津寄勝典「日本紡績業における最初の技術導入—山辺丈夫の企業者活動—」『中国短期大学紀要』（第24巻、189-202ページ、中国短期大学）
- 加藤【1986】：加藤幸三郎「山辺丈夫と近代的紡績業」『講座・日本技術の社会史 別巻2 人物篇 近代』（永原慶次ほか編、189-218ページ、日本評論社）
- 木下【2012】：木下なつき「近代日本におけるアソシエーションと生命保険ビジネス—交詢社と明治生命の関係の検討を軸に（1880-1920）」『生命保険論集』（第180号、93-123ページ、公益財団法人生命保険文化センター）
- ケインズ【1992】：J.M.ケインズ『人物評伝』（大野忠男・熊谷尚夫訳、岩波書店）、*THE COLLECTED WRITINGS of JOHN MAYNARD KEYNES X ESSAYS IN BIOGRAPHY WITH A NEW INTRODUCTION BY DONALD WINCH*, CAMBRIDGE UNIVERSITY PRESS FOR THE ROYAL ECONOMIC SOCIETY, 2013
- 小泉【2012】：小泉仰「西周の現代的意義」『アジア文化研究』（第38号、61-74ページ、国際基督教大学）
- ジェヴォンズ【1984】：W.S.ジェヴォンズ『経済学の理論』（小泉信三ほか訳、日本経済評論社）H.S.Jevons

- ed. *THE THEORY OF POLITICAL ECONOMY*, fourth edition, Palgrave, 2001
- 三辺【1941】:「津田道治著「津田真道」」『三田学会雑誌』(Vol.35, No.3, 385 (一二三) -408 (一四六) ページ, 慶應義塾理財学会)
- 庄司・宇野【1918】: 庄司乙吉・宇野米吉『山邊丈夫君小傳』(紡織雜誌社)
- ジョン【2006】: B. ジョン「明治初年の神仏判然令と近代神道の創出 (特集 近現代の神道・日本文化)」『明治聖徳記念学会紀要』(〔復刊第 43 号, 162-181 ページ, 明治聖徳記念学会)
- 杉山【1981】: 杉山忠平「西周と経済学」『思想』(No.679, 1-18 ページ, 岩波書店)
- 杉山【1983】: 杉山忠平「津田真道における啓蒙と経済 -- 明治啓蒙の一特質にふれて」『思想』(No.706, 16-31 ページ, 岩波書店)
- 西川・ステーンベーク【1997】: 西川俊作・O. ステーンベーク「フィッセルングの経済学と統計学」『津田真道 研究と伝記』(149-176 ページ, みすず書房)
- 堀【1975】: 堀経夫『明治経済思想史』(明治文献)
- 村田【2003】: 村田和博「A. ユアにおける綿製造業の発展と経済的自由」『富山商船高等専門学校研究集録』(第 36 号, 75-83 ページ, 富山高等専門学校)
- 安酸【2016】: 安酸敏真「福沢諭吉と西周の留学体験: わが国の知識人と留学 (その一)」『北海学園大学人文論集』(第 60 号, 142 (一〇三) -121 (一二四) ページ)
- 山崎【2013】: 山崎泰央「CASE2 紡績業の発展を支えた技術者企業家—山辺丈夫 (大阪紡績) と菊池恭三 (大日本紡績)」『ケースブック日本の企業家 -- 近代産業発展の立役者たち』(宇田川勝編, 54-77 ページ, 有斐閣)
- 吉田【1982】: 吉田文和「アンドリュウ・ユア『製造業の原理』とマルクス: マルクス「機械論」形成史研究 (1)」『経済学研究』(第 31 巻第 5 号, 53 (1141) -116 (1204), 北海道大学経済学部)
- Baines【1966】: E.Baines, *History of the cotton manufacture in Great Britain*, 2nd ed. / with a bibliographical introduction by W.H. Chaloner, London: Frank Cass
- Bastiat【1987】: F.Bastiat, *Harmonies of political economy*, translated from the French, with a notice of the life and writings of the author, by Patrick James Stirling, Ann Arbor: Reprinted on demand by University Microfilms International, 1860-1870
- Black【1977】: R.D.C.Black (ed) „*Papers and Correspondence of WILLIAL STANLEY JEVONS Vol. IV*, THE MACMILLAN PRESS
- Jevons【1878】: W.S.Jevons, *SCIENCE PRIMERS POLITICAL ECONOMY*, Macmillan and co.limited, 1919
- Jevons【1882】: Married Women in Factory, *Method of Social Reform and Other Papers*, pp.156-178, Macmillan, 1883/Reprints of Economic Classics, Augustus M Kelley, 1965)
- Newton【1846】: W.Newton, *The London journal of arts, science, and manufactures, and repertory of patent inventions*, Vol. XXIX, W.Newton
- University College, London【1876】: *Calendar Session MDCCCLXXVI.-LXXVII.*, LONDON:TAYLOR AND FRANCIS (次のページにある UCL (ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン) 図書館のウェブページにおいて「電子リソース」から検索, ダウンロード: <http://www.ucl.ac.uk/library> 2017 年 1 月 30 日)
- University College, London【1876】: *Calendar Session MDCCCLXXVII.-LXXVIII.*, LONDON:TAYLOR AND FRANCIS (同上)
- Ure【1836】: A.Ure, *The cotton manufacture of Great Britain: systematically investigated, and illustrated by 150 original figures, engraved on wood and steel; with an introductory view of its comparative state in foreign countries, drawn chiefly from personal survey*, London: Charles Knight
- Ure【2003】: A.Ure, *The philosophy of manufactures*, Reprint. Originally published: London: Charles Knight, 1835
- Vissering【1999】: S.Vissering, *Handboek van praktische staathuishoudkunde*, Thoemmes Press/Kyokuto Shoten

Watson 【1873】 : J.Watson, *The theory and practice of the art of weaving, by hand and power, with calculations and tables, for the use of those connected with the trade*, Glasgow, G. Watson, New and enl. ed

### 参考ウェブページ

British Library : <https://www.bl.uk/>  
(2017 年 1 月 30 日閲覧)

## An Investigation of Takeo Yamanobe' Notebooks: The Relationship with Jevons's Lectures

Shujiro ABE

### Abstract

The purpose of this paper is to contribute to the development of two studies: History of Japanese Economic Thoughts and Jevons's Economic Thought.

Takeo Yamanobe, a famous Japanese entrepreneur, attended Jevons's lectures at University College, London. Yamanobe had enough basic knowledge of what Jevons taught, because he had studied Amane Nishi's textbook which had included many disciplines.

Jevons is said to have taught orthodox economic theory. However he had taught his students the latest contents which he had struggled at that time.

Success of Yamanobe's innovation is due to Nishi's textbook and Jevons' preoccupation with social problems at that time in addition to Yamanobe's efforts.